筑紫女学園大学リポジト

Yaśovijaya on Nik☒epa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 真啓, UEDA, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/70

ヤショーヴィジャヤのニクシェーパ論

上　田　真　啓

Yaśovijaya on Nikṣepa

Masahiro UEDA

1．序

ニクシェーパとは、本来、「（何かを）置く」という意味であるが、ジャイナ教の思想史の中においてこのニクシェーパという言葉は、そういった本来のものとは異なった特別な意味を持っている。Alsdorf［1974］によると、ニクシェーパとは、「体系的な特定の観点を適用することによってキーワードに注目する方法」であり、この方法は始め聖典の注釈文献であるニジュッティ文献群において発展した[1]。テキストにおけるあらゆるキーワードがこのニクシェーパという方法によって分析された。これによって、ジャイナ教の聖典文献におけるひとつひとつの単語を正しく理解し、弟子へ正しく伝えることができる、これがジャイナ教におけるニクシェーパの当初の目的であり意義であった。

どんな単語であれ、それが持っている意味や指示対象はひとつとは限らない。発話者の意図やその単語が使用される状況に応じて指示対象を変えるものである。ジャイナ教聖典の注釈者達はこのような単語の性格に注目し、単語というものはどのような意図で発話されうるのか、あるいはどのような状況下で使用されうるのか、ということを分析して、それらの状況を列挙し、定式化しようと試みた。そしてこの定式に聖典中の単語をひとつひとつ当てはめて考えることによって、それぞれの意味を分析することが可能となり、単語の意味が正しく理解されると考えたのである。数え上げられた状況の組み合わせは総称してニクシェーパと呼ばれた。「状況の組み合わせ」にはいくつかの型が存在する。『タットヴァールタ・スートラ』ではこの組み合わせは「名称」「イメージ」「実体」「状態」の４つに定められ、プラマーナ・ナヤと並んで真実在を正しく理解するための手段として論じられた[2]。

ヤショーヴィジャヤの『ジャイナタルカバーシャー（以下JTBh）』は、ジャイナ教思想史の最も後期に位置する作品であり、彼以前の伝統における哲学的なトピックを簡潔にまとめた綱要

書として知られている。JTBh はプラマーナ章・ナヤ章・ニクシェーパ章の３章から成っており、そのうち、ニクシェーパ章は、内容的な点からしてさらに３つの部分から成っている。すなわち、「ニクシェーパの定義」、「ニクシェーパとナヤの関係」、そして「命我とニクシェーパの問題」である。本稿においては、「ニクシェーパの定義」と、これに密接に関わり合っている「命我とニクシェーパの問題」を主に扱い、ニクシェーパの定義とそれに纏わる議論の背景を明らかにしたい。

２．JTBh におけるニクシェーパの定義

２．１　ニクシェーパの意義

JTBh におけるニクシェーパ章の冒頭部分では、ニクシェーパの定義と意義が以下のように説かれている。

> 文脈などにもとづき、不理解などを断ち切るものとしてしかるべきところに〔言葉を〕適用する（viniyoga）ための、言葉の意味を特定することが、ニクシェーパである。「吉祥（maṅgala）」などといった言葉の意味を特定するから、そして「名称」としての吉祥（maṅgala）などの〔正確なことばの〕適用（viniyoga）が生じるから、ニクシェーパは有益である。
>
> （*Jainatarkabhāṣā* §1）[3]

「名称」「形象」「実体」「状態」というこの組み合わせは、『アヌヨーガドゥヴァーラ・スートラ』や『タットヴァールタ・スートラ』等においても見ることができるが、ニクシェーパの意義や有用性を説いた教説は JTBh 以前では、ヤショーヴィジャヤがここで引用しているように、アカランカの『ラギーヤストラヤ』において説かれている。

> 〔今現在〕問題になっていない（aprastuta）意味を断ち切って、当該の（prastuta）意味を確定するから、ニクシェーパは有益である。
>
> （*Laghīyastraya*. p.26,l.4）[4]

以上のようなニクシェーパの全体的な定義および意義についての考察に続いて、「名称」「形象」「実体」「状態」の順に定義が与えられる。以下では、それぞれの定義について述べていきたい。

２．２　名称（nāma）

まず初めに、ここで定義されている「名称」の特徴は「転用すること（pariṇati）」である。あることばが指し示す本来の意味に関係なく、そのことばを単なる「名称」として、別のものに「転用すること（pariṇati）」が、「名称」のニクシェーパである、と言われる。例えば、牛飼いの子どもを「インドラ」「ディッタ（Ḍiṭṭha; 方言）」「ダヴィッタ（Daviṭṭha; 方言）」と名付けるような場合が「名称」のニクシェーパである。

> 世俗的習慣だけで、〔本来の対象とは〕別の対象に付された、インドラという言葉によって表示される対象、すなわち、牛飼いの子供に関して、"śakra" などといった〔インドラの〕

別名では呼ばないこと、これが「転用（pariṇati）」である。これ（pariṇati）は、あるいは、別の場所では使われずに、たまたま使用された、Ḍittha, Ḍavittha などという言葉によって〔牛飼いの子どもが〕表示されることでもある。

（*Jainatarkabhāṣā* §2）[5]

JTBh におけるこれら「名称」のニクシェーパの定義は、ジナバドラの『ヴィシェーシャーヴァシュヤカバーシュヤ（以下 VĀBh）』に対するマラダーリ・ヘーマチャンドラによる注釈『ブリハッドヴリッティ（以下 VĀBhBV）』25 における理解に基づいている。VĀBh では、「転用」という表現は用いていないが、あることばが本来示す意味とは関係なく、任意の対象に付与される、ということには差異はない。

召使いの子どもなどにおいて、インドラなどといった名前をつけることが、「名称」であると言われる。それはどういったものか？〔という問いに〕答えて言う。〔インドラの〕同義語、つまり “Śakra”, “Purandara”, “Pākaśāsa”, “Śatamukha”, “Hariprabhṛt” などといった同じ〔インドラという〕対象を指すことばの非表示、つまり〔それらの同義語によっては〕呼ばれないこと〔が「名称」である〕。（中略）別のところには用いられずに、任意に牛飼いの子どもなどに名付けがなされる、これもまた「名称」である。例えば、「ディッタ」「ダヴィッタ」のように。

（*Viśeṣāvaśyakabhāṣyabṛhadvṛtti* 25）

また、これと同様の表現によって示される「名称」の特徴は、『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』に対する、同じ作者（マラダーリ・ヘーマチャンドラ）による注釈にも見ることができる。『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』の注釈では、本来の「名称」の定義にあたる第10経の直前に前置きのような形で VĀBh v.25[6] と似通った出典不明の一節[7] を引用し、以下のような「名称」についての理解を示している。

「名称」のニクシェーパにおいては、本来の対象が存在する限りにおいて持続するものと、そうでないものが考えられる。前者に関しては、例えば「メール山」のようなものであり、後者は「デーヴァダッタ」などの例が挙げられている[8]。あるいはまた、本や紙きれ、絵に書かれた、実在物（vastu; bhāva-indra）を表示している、"I" "N" "D" "R" "A" などの文字列（varṇa-āvali）もまた、「名称」としてのインドラと言われる。

２．３　形象（sthāpanā）

「形象」とは、本来の対象とは異なってはいるが、本来の対象に似せられたもの、あるいは本来の対象を意図して作られたものを、本来の代用として呼ぶことである。

「形象」は、その〔本来の〕対象とはちがうもの（vastu）が、その〔本来の対象として〕意図すること（abhiprāya）によって置き代えられたもの、〔たとえば〕【1-1】絵などにはそのままの姿形として、そして、【1-2】貝殻（akṣa）などには姿形を欠いた〔記号として〕、【2-1】絵などに関しては一時的な〔姿形として〕、また、【2-2】吉祥な神の寺院の像に関しては

半永続的な〔姿形として置かれているもの〕それが形象のニクシェーパ（sthāpanā-nikṣepa）である。例えば、ジナの像は形象のジナ（sthāpanā-jina）であり、インドラ像は形象のインドラ（sthāpana-indra）〔といったように〕。

（*Jainatarkabhāṣā* §3）[9]

人が「形象」をあるものの代用とする場合には、そっくりそのままもとの姿に似せて作る場合と、全くもとの特徴を欠いたものを代用とする場合の２通りがある。

２．４　実体（dravya）

JTBh では、「実体」に３通りの解釈が与えられている。１つめは、あることばが、本来の指示対象の過去の状態や未来の状態を指し示す場合である。ここでは、過去にインドラであったが、現在はそうではない状態、すなわち、「過去のインドラ」を単に「インドラ」と呼ぶ場合や、「未来のインドラ」を単に「インドラ」と呼ぶ場合に言及されているが、理解しやすい身近な例として、現在は牛乳が入っていない状態にあっても、過去に入っていたか、将来入るのであれば、それを「牛乳瓶」と呼ぶ場合も挙げられている[10]。この解釈は、実体のニクシェーパの基本的な性質として複数のテキストに見られる。

次に、ヤショーヴィジャヤは、あることばが、二義的な意味で使われる場合も「実体」のニクシェーパというカテゴリーに含まれると説く[11]。ここでは、「アンガーラマルダカは劣った（dravya）先生である」という例が挙げられている。同じこの例によって「実体」を「劣った」もしくは「二義的な」として定義しているのは、ヘーマチャンドラの『プラマーナ・ミーマーンサー』である。『プラマーナ・ミーマーンサー』の当該箇所における文脈は、感覚器官を「実体」と「状態」とにわけて解釈するというものであり[12]、ニクシェーパの定義にまつわる文脈ではないが、ヤショーヴィジャヤは「実体」と「状態」という分類方法に共通点を見出し、ニクシェーパの「実体」に組み込んだと考えることができるだろう。

最後に「実体」に与えられている意味は「適切でない（anupayoga）」というものである[13]。適切でない儀礼は「実体」である、というのである。適切ではないものの、それは間接的にはよい果報の原因となるから「実体」である。

2.5　状態（bhāva）

「状態」の定義は、以下のとおりである。

意図された行為の経験をあらわす、そのものの本質がニクシェーパされたとき、それ（本質）が「状態」のニクシェーパである。たとえば、力を持つという行為によってあらわされたものが、「状態」のインドラである。

（*Jainatarkabhāṣā* §5）[15]

「実体」とは対照的に、あることばが本来指し示すべき現在の姿、それが「状態」である。

３．ニクシェーパについての議論

JTBh では、これら基本的な定義の後に、ニクシェーパについての議論が展開される。先述のニクシェーパの定義同様、これらもまた VĀBhBV の記述に負うところが大きい。ヤショーヴィジャヤはVĀBhBVの議論を簡潔にまとめて紹介している。この簡潔にまとめられた議論を、VĀBhBV の記述にそってあきらかにし、また、JTBh と VĀBhBV との比較を通じてどの程度簡略化されているのかを明らかにしたい。

３．１　それぞれの違いについて（JTBh§６）

まずは反論の要旨から検討してみたい。反論は、「状態」以外の３つ、つまり「名称」「形象」「実体」のニクシェーパに違いはないから、それらを区別することは無意味であるというものである。理由として、「名称」「形象」「実体」のいずれの場合にもそれぞれの特徴が共通して認められるからと述べられる。つまり、「名称」という名付けの行為は「形象」や「実体」にも当てはまることであるし、「形象」という姿形は他の二つにおいても認められ、「実体」という性質は「名称」と「形象」の二つにおいても認めることができるから、この３者を区別する意味は無いというのである。これは VĀBh の第52偈とその注釈 VĀBhBV に見られるものと内容的にほぼ符合する。具体的には引用部分と認められるのは以下の部分である（網掛け部分）。

JTBh §6 [14]

nanu bhāva-varjitānāṃ nāmādīnāṃ kaḥ prati-viśeṣas triṣv api vṛttyaviśeṣāt? tathāhi --- 1）nāma tāvan nāmavati pada-arthe sthāpanāyāṃ dravye cāviśeṣeṇa vartate/ 2）bhāvārtha-śūnyatvaṃ sthāpanā-rūpam api triṣv api samānam, triṣv api bhāvasyābhāvāt/ 3）dravyam api nāma-sthāpanā-dravyeṣu vartata eva, dravyasyaiva nāma-sthāpanā-karaṇāt, dravyasya dravye sutarāṃ vṛtteś ceti viruddha-dharmādhyāsābhāvān naiṣāṃ bhedo yukta iti cet

VĀBhBV 52

tadevaṃ upadarśitaṃ nāmasthāpanādravyabhāvabhedataś carurvidhaṃ maṅgalam/ eteṣu can āmādimaṅgalesv ādyatrayasya ‘nyonyam abhedaṃ paśyan paraḥ prerayati ---

abhihāṇaṃ davvattaṃ tayatthasunnattaṇaṃ cat ullāiṃ/ ko bhāvajjiāṇaṃ nāmāīṇaṃ paiviseso?//52//

bhāvavarjitānāṃ bhāvam ekaṃ varjayitvā śeṣāṇāṃ nāmādīnāṃ nāmasthāpanādravyāṇām ityarthaḥ, kaḥ prativiśeṣaḥ? na kaścid ityarthaḥ/ kutaḥ? ity cet/ ucyate --- yata etāni triṣv api tulyāni/ kāni punas tāni?, ityāha --- 1）abhidhānaṃ tāvad nāma triṣv api tulyam, nāmavati padārthe, sthāpanāyāṃ, dravye ca maṅgalābhidhānamātrasya sarvatra bhāvāt/ 3）tathā dravyatvam api triṣv api tulyam, yato “jassa ṇaṃ jīvassa vā ajīvassa vā maṅgalaṃ ti nāma kīrai” ityādivacanād nāmani tāvad dravyam eva ‘bhisaṃbadyate, sthāpanāyām api “yat sthāpyate” iti vacanād dravyam eva ‘yojyate,

dravye tu dravyatvaṃ vidyata eva, iti triṣv api dravyatvasya tulyatā/ 2）tathā tadarthaśūnyatvaṃ ca bhāvārthaśūnyatvaṃ ca triṣv api samānam, nāmasthāpanādravyeṣu bhāvamaṅgalasyābhāvāt/

これに対する答えとしてまず、「形象」が他の二つと異なっていることが、インドラの像の例によって論じられる。インドラの像が作られる時、本来のインドラの姿形に似せようという作者の意図があり、そしてインドラの像を見た人には、インドラの容姿についての知識が生じる。さらにはインドラ像に対する礼拝といった行為が生じ、その結果として子供を授かるといった結果が生じる。「インドラ」と単に名付けられた牛飼いの子供や、「実体」のインドラにはそのようなことは経験されない。したがって、「形象」は他の二つとは異なっているのである。これに対応する VABh の箇所は、第53偈である。

JTBh §6 [15]

na ; anena rūpeṇa viruddhadharmādhyāsābhāve 'pi rūpāntareṇa viruddhadharmādhyāsāt tadbhedopapatteḥ/ tathāhi --- nāmadravyābhyāṃ sthāpanā tāvad ākārābhiprāyabuddhikriyāphaladarśan ād bhidyate, yathā hi sthāpanendre locana-sahasrādyākāraḥ, sthāpanākartuś ca sadbhūtendrābhiprāyo, draṣṭuś ca tadākāradarśanād indrabuddhiḥ, bhaktipariṇatabuddhīnāṃ namaskaraṇādikriyā, tatphalaṃ ca putrotpattyādikaṃ saṃvīkṣyate, na tathā nāmendre dravyendre ceti tābhyāṃ tasya bhedaḥ/

VĀBhBV 53

pareṇaivam aviśeṣe prerite yo viśeṣaḥ, tam abhidhitsuḥ sūrir āha ---

āgooro ‘bhippao buddhī kiriyā phalaṃ cap āeṇa/ jaha dīsai ṭhavaṇiṃde na tahā name na davviṃde//53//yathā sthāpanendre ākāro locanasahasrakuṇḍalakirīṭaśacīsaṃnidhānakarakuliśadhā raṇasiṃhāsanādhyāsanādi-janitātiśayo dehasaundaryabhāvo dṛśyate, tathā sthāpanākartuś ca yathā sadbhūtendrābhiprāyo vilokyate, tathā draṣṭuś ca yathā tadākāradarśanād indrabuddhir upajāyate, yathā cainamupasevamānānāṃ tadbhaktipariṇatabuddhīnāṃ namaskaraṇādikā kriyā saṃvīkṣyate, phalaṃ ca yathā prāyeṇaupalabhyate putrotpattyādikam, na tathā nāmendre, na 'pi dravyendre/

これに引き続いて、JTBh では「実体」が他の二つとも異なっていることが論じられる。「実体」は本来その単語が指し示す対象、すなわち最終的に「状態」になる原因であるから、他の二つとは異なっているのである。ここでは二つの例が根拠となっている。一つめは、意識のない（anupayukta）話者は「実体」であるというものである。意識のない話者は意識を伴った時には、「状態」になるというこの例は、先ほどの定義では言及されていなかった「実体」のもう一つの解釈に起因する。『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』や VĀBh には、「聖典に関するもの」と「聖典に関係のないもの」という「実体」の下位区分が示されているが、特に JTBh のこの例においてはVABh 29 からの影響が大きいと認められる。「聖典にもとづく（āgamato）」「実体」とは、聖

典の意味を知っているが「意識の伴っていない（anupayukta）」者を指すことばである。この意識を伴っていない（anupayukta）「聖典に関する」「実体」が、意識を伴った者となった時、「状態」となるのである。現在のものではない過去・未来の姿を指すといった、時間的な要因に着目した先述の定義ではなく、このように、「意識を伴って」いるかいないかといった要因を主眼に置いた「実体」と「状態」の区別は、聖典の文言を解釈する方法であるニクシェーパの定義においては必ず言及される主要なトピックである。「聖典に関係のないもの」にはさらに下位区分があり、それらのいくつかにはさらなる下位区分が設定されており、各項目で意味の重複も所々に見受けられる。

二つめは、出家者としての命我が、後の生まれにおいて「状態」のインドラへと変化するという理由で「実体」のインドラと呼ばれる場合である。出家者は現在はインドラではないが、将来的にはインドラとして生まれる、という理由によって「実体」のインドラと呼ばれるのである。

「形象」が他の二つと異なり、「実体」が他の二つと異なっているならば、「名称」もまた自動的に他の二つと異なっていることになる。このようにして、それぞれ三つは互いに区別されるべきであるということが証明されるのである。

JTBh §6 [16]

dravyam api bhāvapariṇāmikāraṇatvān nāmasthāpanābhyāṃ bhidyate, 1）yathā hy anupayukto vaktā dravyam, upayuktatvakāle upayogalakṣaṇasya bhāvasya kāraṇaṃ bhavati, 2）yathā vā sādhujīvo dravyendraḥ sadbhāvendrarūpāyāḥ pariṇateḥ, na tathā nāmasthāpanendrāv iti/ nāmāpi sthāpanādravyābhyām uktavaidharmyād eva bhidyata iti/ dugdhatakrādīnāṃ śvetatvādinā 'bhede 'pi mādhuryādinā bhedavan nāmādīnāṃ kenacid rūpeṇābhede 'pi rūpāntareṇa bheda iti sthitam/

VĀBh 54

tadevaṃ spaṣṭatayā lakṣyamāṇatvād ādāv eva nāmadravyābhyāṃ sthāpanāyā bhedam abhidhāya nāmasthāpanābhyāṃ dravyasya bhedam abhidhitsur āha ---

bhāvassa kāraṇaṃ jaha davvaṃ bhāvo a tassa pajāo/ uvaogapariṇaimao na tahā nāmaṃ navā ṭhavaṇā//54//

yathānupayuktavaktṛprabhṛtikaṃ sādhudravyendrādikaṃ vā dravyaṃ bhāvsyopayogarūpasya bhāvendrapariṇatirūpasya vā yathāsaṃkhena kāraṇaṃ nimittaṃ bhavati/ yathā ca ‘upaogapariṇaimao tti’ upayogamayo bhāvendrapariṇatimayaś ca bhāvo yathāsaṃkhyena tasyānupyuktavaktṛprabhṛtikasya sādhudravyendrādikasya vā dravyasya paryāyo dharmo bhavati, na tathā nāma, nāpi sthāpaneti/ idam uktaṃ bhavati --- yathānupayukto vaktā dravyaṃ kadācid upayuktatvakāle tasyopayogalakṣaṇasya bhāvasya kāraṇaṃ bhavati, so'pi vopayogalakṣaṇo bāvas tasyānupyuktavaktṛrūpasya dravyasya paryāyo bhavati, yathā vā sādhujīvo dravyendraḥ san bhāvendrarūpāyāḥ pariṇateḥ kāraṇaṃ bhavati, so 'pi vā bhāvendrapariṇatirūpo bhāvas tasya sādhujīvadravyendrasya paryāyo bhavati, na tathā

nāmasthāpane/ atas tābhyāṃ dravyasya bhedaḥ, nāmnas tu sthāpanādravyābhyāṃ bhedaḥ sāmarthyād evāvasīyata iti/ tad evaṃ yadyapi parapreritaprakāreṇa nāmasthāpanādravyāṇām abhedaḥ, tathāpy uktarūpeṇa prakārāntareṇa bhedaḥ siddha eva, na hi dugdhatakrādīnāṃ śvetatvādinā 'bhede 'pi mādhuryādināpi na bhedaḥ, anantadharmādhyāsitatvād vastuna iti bhāvaḥ//

4．dravya の問題（命我に関して）

命我をニクシェーパしようとしたときに、「実体としての命我」だけは、先に挙げた「実体」の意味に当てはめて考えることができない。ニクシェーパにおける「実体」とは、上で見たように、「過去にある状態にあったもの」あるいは「ある状態に至る前のもの」を基本的には意味する。これを命我に当てはめて考えると、「実体としての命我」とは、「過去に命我であった（が現在は非命我である）もの」もしくは、「（現在は非命我であるが）命我に至る前のもの」ということになる。しかしジャイナ教の教義においては、命我は過去も現在も未来においてもそれ自体変化することはないのである。

この矛盾をどう解決するべきなのか、ヤショーヴィジャヤは『タットヴァールタ・アディガマ・スートラ』（TAAS）の注釈者、シッダセーナ・ガニの解釈を自説において紹介している。

> 「名称」などの４つが行き渡るという考え〔は正しい〕。なぜなら、おおよそすべての他のものに、それ（ニクシェーパ）は妥当であるから。ある場合には妥当ではない、というその限りにおいて、〔それだけで〕「不遍充」であることにはならない、と先人たちは〔言う〕。
>
> （*Jainatarkabhāṣā* §9）[17]

第一の解決策としては、「実体」というニクシェーパに関しては、命我がキーワードとなった場合のみ例外であってその他については問題がない、ほとんどすべての場合において有効であるからしたがって４つのニクシェーパは有効である、というのである。

次なる解決策として挙げられているのは、「実体」のもう一つの定義「意識が働いているかどうか」ということによって命我というキーワードを考えた場合は何の問題も生じないので、「実体」としての命我には矛盾はない、というものである。第三の解決策がこれに続き、命我一般ではなく特定の、例えば「人としての」命我と限定することによってこの問題が解決されるというのである。

> 「命我」ということばの対象を知っているけれども、それに意識が働いていない人が、「実体の命我」である、とも〔彼等は〕言っている。別の人等は 言う、「私こそが『人としての命我（実体の命我）』である、と言われるべきである。後の『神としての命我』であり、（現在では）顕現していない事により、私は、かの、将来なろうとしている『神としての命我』の原因であるから。私こそは、かの『神としての命我』となるだろう。従って、私は現在は、『実体の命我』なのである」と。以下のように彼等は言っている「それぞれ前の命我が、それぞれあとに生じてくるものの原因である」と。

(*Jainatarkabhāṣā* §9)[18]

5．結論

ニクシェーパ章においても、ヤショーヴィジャヤは主に VĀBhBV に拠って記述しているが、先にも見たとおり、ニクシェーパを主に取り扱っている他の文献の記述も自作において集約させていると見ることができる。ナヤとニクシェーパの関係については、大きな問題であるから、また別の機会をもうけたい。

一次文献並びに参考文献

Anuyogadvārasūtra

Anuyogadvārasūtram, ed. by Munirāja Punṇyavijayaji Mahārāja, with three commentaries Jinadāsa Gaṇi Mahattara's *Cūrṇi*, Haribhadra Sūri's *Vivṛti* and Maladhāri Hemacandra Sūri's *Vṛtti*, ed. by Muni Jambūvijayajī, Jaina Āgama Series No. 18, 2Vols., Shrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, Bombay, 1999

Jainatarkabhāṣā

(1) *Jainatarkabhāṣā of Mahopadhyāya Śrī Yaśovijaya Gaṇi*, eds. Pandit Sukhlalji Sanghavi, Pandit Mahendra Kumar Sastri and Pandit Dalsukh Malvania, Saraswati Oriental Series No. 7, Saraswati Pustak Bhandar, Ahmedabad, 1938（rep. 1993）

(2) *Jainatarkabhāṣā, śāsanasamrāṭ bālabrahmacārī ācāryapravara śrī vijayanemisurīśvara paṭṭālaṅkāra siddhāṃtavācaspati nyāyaviśādara ācārya śrī vijayodayasūrīśvagpraṇīta ratnaprabhākhyāṭīkayā samalaṃkṛtā,* Jaśavantalāla Giradharalāl Śāha, Ahmedabad, 1941.

(3) *Mahopādhyāya Yaśovijaya's Jaina Tarka Bhāṣā with Translation and Critical Notes*, tr. by Dr. Dayanand Bhargava, Motilal Banarsidas, Delhi, 1973.

Laghīyastraya

Akalaṅkagranthatrayam (Svopajñavivṛtisahitam Laghīyastrayam, Nyāyaviniścayaḥ and Pramāṇasaṃgrahaḥ) of Śrī Bhattākalaṅkadeva, ed. Nyayacharya Pandit Mahendra Kumar Sastri, Singhi Jaina Series No. 12, Singhi Jaina Granthamala, Ahmedabad-Calcutta, 1939

Pramāṇamīmāṃsā

Hemacandra's Pramāṇamīmāṃsā, text and tr. by Satkari Mookerjee and Nathmal Tatia, Tara Publications, Varanasi, 1970

Tattvārthādhigamasūtra

Tattvārthādhigamasūtra by Umāsvāti, being in the original Sanskrit with the *Bhāṣya* by the author himself, ed. by Mody Keshavlal Premchand, Bibliotheca Indica No. 1044, Calcutta, 1903.

Tattvārthādhigamasūtraṭīkā

Tattvārthādhigamasūtra by Umāsvāti Vācaka, *together with his connective verses commented upon by* Śrī Devaguptasūri and Śrī Siddhasenagaṇi, ed. by Hralal Rasikdas Kapadia, Sheth Devchand Lalbhai Jain Pustakoddhar Fund Series No. 67, Jivanchand Sakerchand Javeri, 1926.

Viśeṣāvaśyakabhāṣyabṛhadvṛtti

Viśeṣāvaśyakabhāṣya, ed. by Bhuvanabhānu Sūri, 2Vols., Divya Darśan Trust, Mumbai, 1982.

Alsdorf, Ludwich

1974 "NIKṢEPA --- A Jaina Contribution to Scholastic Methodology", Kleine Schriften, pp. 455-463, Wiesbaden, 1974.

Hanaki, Taiken

1970 *Aṇuogaddārāiṃ (English Translation)*, Prakrit Jain Institute Research Publication Series vol.5, Research Institute of Prakrit, Jainology & Ahimsa, Bihar, 1970.

藤永 伸

2006 「ニクシェーパ」,『ジャイナ教研究』12, pp.1-16, ジャイナ教研究会, 京都, 2006.

Kalghatgi, T. G.

1981 *Jaina Logic (Anekānta, Naya and Syādvāda)*, Shri Raja Krishen Jain Charitable Trust, New Delhi, 1981.

長崎 法潤

1988 『ジャイナ認識論の研究』, 法蔵館, 京都, 1988.

Śāstri, Kailaścandra

1970 *Pramāṇa-naya-nikṣepa-prakāśa*, Yugavīra Samantabhadra Granthamālā 2, Vīra Seva Mandir Ṭrasṭa Prakāśan, Varanasi, 1970

（本稿は平成24年度人間文化研究所客員研究員助成費および「公益財団法人松下幸之助記念財団」の助成に基づく研究成果の一部である。なお、*Jainatarkabhāṣā* の翻訳にあたっては、藤永伸博士（都城工業高等専門学校教授）より多くの示唆を頂いた。ただし翻訳に誤りがあるならば、すべて筆者の責任である。また筑紫女学園大学の宇野智行先生には貴重な資料をご提供いただいた。ここに記して謝意を表したい。）

注

1 Alsdorf［1974：455］: "This curious system of subjecting key words to an investigation by applying a scheme of fixed viewpoints may be less fruitful philosophically, but it occupies almost key position in early scholastic literature, particularly the nijjuttis."

2 TAAS 1.5: nāmasthāpanādravyabhāvatas tannyāsaḥ//

3 JTBh, p. 25, ll. 14-16: prakaraṇādivaśenāpratipatyā(-ttyā-）divyavacchedakayathāsthānaviniyogāya śabdārtharacanā viśeṣā nikṣepāḥ/ maṅgalādipadārthaniḥkṣepān nāmamaṅgalādiviniyogopapatteś ca nikṣepāṇāṃ phalavattvam/

4 "aprastutārthā 'pākaraṇāt prastutārthavyākaraṇāc ca nikṣepaḥ phalavān/"

5 JTBh, p. 25, ll. 19-22: saṅketita-mātreṇānyārthasthitenedrādiśabdena vācyasya gopāladārakasya śakrādiparyāyaśabdānabhidheyā pariṇatir iyam eva vā yathānyatrāvartamānena yadṛcchāpravṛttena ḍitthaḍavitthādiśabdena vācyā/

6 VĀBhBV, p. 12: yat kasmiṃś cid bhṛtakadārakādau indrādyabhidhānaṃ kriyate, tad nāma bhaṇyate/ kadhaṃ bhūtaṃ tat?, ity āha---paryāyāṇāṃ śakrapurandarapākaśāsanaśatamakhahariprabhṛtīnāṃ samānārthavācakānāṃ dhvanīnām anabhidheyam avācyam,...kintv anyatra 'vartamānam api yad evam eva yadṛcchayā kenacid gopāladārakāder abhidhānaṃ kriyate, tad api nāma, yathā ḍiṭṭho ḍavitahha ityādi/

7 VĀBhBV, p. 11: pajjāyānabhidheyaṃ ṭhiamaṇṇatthe tayatthaniravekkhaṃ/ jāicchiaṃ ca nāmaṃ javadavvaṃ ca pāeṇa//25//a

［skt: paryāyānbhidheyaṃ sthitam anyārthe tadarthanirapekṣam/ yādṛcchikaṃ ca nāma yāvaddravyaṃ ca prāyeṇa//］

8 ADS, p. 17, ll. 11-12: yad vastuno ‘bhidhānaṃ sthitam anyārthe tadarthanirapekṣam/ paryāyānabhidheyaṃ ca nāma yādṛcchikaṃ ca tathā//

9 JTBh, p. 25, l. 22: merv-ādi-nāmāpekṣayā yāvad-dravya-bhāvinī, devadattādi-nāmāpekṣayā cāyāvad-dravya-bhāvinī

10 JTBh, p. 25, ll. 25-28: yat tu vastu tadarthaviyuktaṃ tadabhiprāyeṇa sthāpyate, citrādau tādṛśākāram, akṣādau ca nirākāram, citrādyapekṣayetvaraṃ, nandīśvaracaityapratimādyapekṣayā ca yāvatkathikaṃ sa sthāpanāniḥkṣepaḥ, yathā jinapratimā sthāpanājinaḥ, yathā cendrapratimā sthāpanendraḥ/

11 JTBh, pp. 25-26: bhūtasya bhāvino vā bhāvasya kāraṇaṃ yan nikṣipyate sa dravyaniḥkṣepaḥ, yathā 'nubhūtendraparyāyo 'nubhaviṣyamāṇendraparyāyo vā indraḥ, anubhūtaghṛtādhāratvaparyāye 'nubhaviṣyamāṇaghṛtādhāratvaparyāye ca ghṛtaghaṭavyapadeśavat tatrendraśabdavyapadeśopapatteḥ/

【訳】〔過去において〕そうであった〔状態〕、〔未来において〕そうであるだろう状態（bhāva）の原因（kāraṇa）が特定化されたとき、それ（原因）が dravya-nikṣepa である。例えば、過去にインドラの様態をもっていたような、あるいは未来にインドラの様態をもつようなものは、インドラである。過去に牛乳が入っていたという様態や、未来に牛乳が入るであろう様態があれば、〔そのようなものを〕「牛乳瓶」と呼ぶのと同様に、それ（過去においてインドラの様態を持っていた、あるいはもつであろうもの）に対して、インドラという言葉で呼ぶことがあるから。

12 JTBh, p. 26: kvacid aprādhānye 'pi dravyaniḥkṣepaḥ pravartate, yathā 'ṅgāramardako dravyācāryaḥ, ācāryaguṇarahitatvāt apradhānācārya ityarthaḥ/

【訳】二義的という意味でも dravya-nikṣepa は使われる。たとえば、aṅgāra-mardaka は劣った（dravya）先生である。先生（ācārya）の性質を欠いているから、第一義的でない（apradhāna）先生、という意味である。

13 *Pramāṇamīmāṃsā*, p.21: aprādhānye vā dravyaśabdo yathā aṅgāramarddako dravyācārya iti/ apradhānam indriyaṃ dravyendriyam, vyāpāravaty api tasmin sannihite ‘pi cālekaprabhṛtini sahakāripaṭale bhāvendriyaṃ vinā sparśādy upalabdhyasiddheḥ/

長崎［1988：245］「あるいは dravya の語は「劣れる（aprādhānya, 下位の）」という意味において考えられる。たとえば,「Aṅgāramarddaka は劣った師（dravya-ācārya）である」〔と言われるからである。だから〕実体感官（dravya-indriya）とは「劣れる感官である（aprādhānam indriyam）」。それは,〔dravya-indriya〕がはたらいても、

さらに〔たとえば〕光等の補助因（sahakārin）の群がそこにあっても, 作用感官（bhāva-indriya）がなければ, 触等の知覚は成り立たないからである。」

14 JTBh, p. 26: kvacid anupayogo 'pi, yathā 'nābhogenehaparalokādyāśaṃsālakṣaṇenāvidhinā ca bhaktyāpi kriyamāṇā jinapūjādikriyā dravyakriyaiva, anupayuktakriyāyāḥ sākṣān mokṣāṅgatvābhāvāt/ bhaktyā 'vidhināpi kriyāmāṇā sā pāramparyeṇa mokṣāṅgatvāpekṣayā dravyatām aśnute, bhaktiguṇenāvidhidoṣasya nir-anubandhīkṛtatvād ity ācāryāḥ/

【訳】適切さのないもの（anupayoga）という意味でもまた、〔dravya-nikṣepa は使われる〕。例えば、欲から離れておらず、この世と天界などに対する望みに特徴づけられた、無秩序な信仰によってなされる、ジナに対する儀礼（pūjā）などの行為は、dravya-kriyā である。適切さを欠いた（anupayukta）行為は、直接的には解脱に至る構成要素（aṅga）ではないから。無秩序な信仰によってなされるそれ（行為）は、段階的に（pāramparyana）解脱に至る構成要素であるという点においては、dravya であると認められる。「信仰という特質によって、無秩序と言う過失は切り離されたもの（niranubandhīkṛta）３となるから」と先生は言う。

15 JTBh, p. 26:vivaskṣitakriyānubhūtiviśiṣṭaṃ svatattvaṃ yan nikṣipyate sa bhāvaniḥkṣepaḥ, yathā indanakriyāpariṇato bhāvendra iti/

16 【訳】bhāva（-nikṣepa）以外の、「名称」をはじめとした〔３つのニクシェーパ〕に関して、個々の違いは何であるか。３つの中では、際立った違いはないから。以下の如くである。まずはじめに、「名称」は、名前を持った言葉の意味にも、「形象」にも、「実体」にも無区別に働いている。本来の対象（bhāva-artha）を欠いているという性質を持った「形象」は、〔「名称」などの〕３つに共通している。３つには「状態」がないから。「実体」は、「名称」「形象」「実体」のうち〔いずれにも〕に存在する。「実体」は「名称」と「形象」の作具（karaṇa）であるから。dravya〔-nikṣepa されたもの〕にも、「実体」は当然存在する。〔３つの間の〕矛盾した特徴が存在しないから、これら［３つ］の区別は適当ではない。

17 【訳】はじめに、「形象」は、「姿形（ākāra）」「意図（abhiprāya）」「知識（buddhi）」「行為（kriyā）」「結果（phala）」が直接経験されるから、「名称」と「実体」とは区別される。例えば、「形象」としてのインドラの場合、千の目などの「姿形（ākāra）」がある。像の作り手（sthāpanā-kartṛ）の、実在する「状態」のインドラにもとづく「意図（abhiprāya）」がある。そして、〔像を〕みる人の、それ（インドラ）の姿形を見ることにもとづいたインドラに関する「知識（buddhi）」がある。信仰に変容する知を持つ人には、礼拝などの「行為（kriyā）」があり、息子を授かるといったようなその（行為の）「結果（phala）」が見られる。「名称」としてのインドラや「実体」のインドラの場合はそのようなことはない。したがって、それら〔２つの nikṣepa〕との、その（sthāpanā-nikṣepa）違いがあるのである。

18 【訳】また、「実体」は、「状態」に変容する原因であるから、「名称」や「形象」と区別される。例えば、意識を欠いた（anupayukuta）話者、すなわち「実体」〔の話者〕は、適切であるような時には、精神作用を特徴とするような「状態」〔の話者〕の原因である。あるいは、出家者としての命我は、「実体」のインドラである。実在する「状態」のインドラそのものに変容するから。「名称」としてのインドラや「形象」としてのインドラにはそのようなことはないので〔「実体」のインドラとは区別される〕。「名称」もまた、〔以上において〕述べられた違いにもとづいて、「形象」「実体」と区別される。牛乳（dugdha）とヨーグルト（takra）との間には、「白いこと」などに基づいた区別はないが、「甘さ」などにもとづく違い〔はあるの〕と同様に、「名称」など

に関しても、或るあり方によっては区別はないが、別のあり方によっては区別はある、ということが確定された。

19 JTBh, p. 28, ll. 24-26: nāmādicatuṣṭayasya vyāpitābaṅgaḥ, yataḥ prāyaḥ sarvapadārtheṣv anyeṣu tat sambhavati/ yady atraikasmin na sambhavati naitāvatā bhavaty avyāpiteti vṛddhāḥ/

20 JTBh, p. 28-29: jīvaśabdārthajñas tatrānupayukto dravyajīva ity apy āhuḥ/ apare tu vadanti --- aham eva manuṣyajīvo［dravyajīvo］'bhidhātavyaḥ uttaraṃ devajīvam aprādurbhūtam āśritya ahaṃ hi tasyotpitsor devajīvasya kāraṇaṃ bhavāmi, yataś cāham eva tena devajīvabhāvena bhaviṣyāmi, ato 'ham adhunā dravyajīva iti/ etat kathitaṃ tair bhavati--pūrvaḥ pūrvo jīvaḥ parasya parasyotpitsoḥ kāraṇam iti/

（うえだ　まさひろ：人間文化研究所　客員研究員）